

〈論説〉

解離性同一性障害（多重人格）と刑事責任

——わが国の事例を中心として——

川 口 浩 一

一 問題の所在

私は以前アメリカの事例を中心として解離性人格同一性障害、いわゆる多重人格と刑事責任の關係について短い論文を書いたことがある。⁽²⁾その後、その論文でも若干言及した幼女連続殺人事件の第一審判決が出された。⁽³⁾この判決は、被告人が多重人格者であるとした鑑定を斥け、完全責任能力を肯定し、死刑判決を下した。この判例では解離性同一性障害の刑事責任自体は論じられなかったが、多重人格を肯定した鑑定は注目され、控訴されたことによって、さらにこの点が争われる可能性が残されている。またこの事例以前に被疑者が多重人格であるとした簡易精神鑑定によって不起訴処分にされた事例が報告されている。⁽⁵⁾本稿では、わが国におけるこの二つの事例を検討し、解離性人格障害と刑事責任の問題を再考したい。

二 事 例

上述のように、解離性同一性障害と刑事責任が問題となったわが国の事例が二件ある。以下そのそれぞれについて事例を紹介し、検討を加える。

(一) 「由加里ちゃん」事例⁽⁶⁾

〔事案〕 本件における被疑者、鈴木由加里（仮名）は、彼女が二歳の時、父親が離婚したため、初め祖母、父親、叔父・叔母らと同居していたが、やがて父親が外に女をつくり別居するようになったため、祖母と弟との三人で生活するようになった。中学校の時には友人から、母親が生きていることを知らされ、両親から見捨てられたとの思いが強まり、自暴自棄になり、成績も低下したが、高校に入ると一転して成績も優秀となり、短大に進学した。しかし短大の最初の夏休みに唯一人心の拠り所にしていた叔母のSが急死し、強い衝撃を受け、その通夜の晩に彼女はふと遠く離れたところから眺めている「由加里ちゃん」の存在を初めて意識した。すぐに「由加里ちゃん」と「私」が入れ替わり、親戚の人達と話しているのが「由加里ちゃん」で遠くから眺めているのが「私」だということに気がついた。その後も、「由加里ちゃん」は時々現れるようになった。一方彼女は、その間入院して試験が受けられなかったこともあって短大を中退した。その後昭和六二年に、X（三九歳）と結婚していた叔母のY（三五歳）から仕事を手伝ってほしいと誘われたため、由加里は一週間程仕事を手伝った。この時にはXと仕事以外何の関係も持たなかったが、同年九月頃に再び仕事を手伝うようになって一カ月ほど経ってから、Xと肉体関係を持った。それまで由加里は二人の男性と付き合ったことはあったが、その二人とは手を握ったこともなくXが初めて肉体関係を持つ男性となった。叔母Yの目を盗んで肉体関係を持っていたが、Yに気付かれて同年の一二月末に高知に帰らされた。翌昭和六三年になりXから会いたいとの電話が入り、由加里は家出して神戸でYと落ち合った。父親は由加里の行方を捜して親戚や知人らに連絡したが行方が分からず、警察に家出人捜索願いを出した。Xのところにも連絡が入ったが、Xは由加里の居所は知ら

ないと言いつ張った。実際には、Xは自宅から車で一〇分ほどのところに二DKのアパートを借りて由加里を住ませていた。由加里は高知の実家に電話を入れようと思ったこともあったが、積極的にXとの関係を絶とうとはしなかった。由加里は、このアパートで四年四カ月間に渡って隠れ暮らしていた。「外で働いたら見つかってしまう」と言われたため、由加里は外に出て働くこともできず、近くに買い物に行く時以外は一日中部屋の中に居た。由加里は毎日顔を出すXと話す以外は誰とも話さず、飼っていた猫と熊のぬいぐるみを遊び相手にしていた。由加里にとって食べて寝ての繰り返しの生活であったが、実際に生きているのが自分自身であるのかもはっきりとせず、起きて何かしている時は「由加里ちゃん」であり、寝て夢を見ている時は「私」であり、私はいつも夢を見ていたから夢の中で遊んでいたと彼女は鑑定人に語った。しかしこのような生活も平成四年六月二〇日頃にアパートの家賃の領収書がYの目にとまったことで発覚し、YがXを連れてアパートにやって来て由加里は見つけられてしまった。Yの顔を見た途端、ばつの悪さよりも寧ろほっとした安堵の気持ちの方が強かった。由加里は六月下旬に高知に送り返され、YとXも七月に離婚しYもまた高知に戻った。由加里は実家の近くの工場で働き始めたが、家族に分からないようにXと連絡を取っていた。由加里は七月末に再び家出して名古屋でXと会った。それはXのことが忘れられないというよりも、Xとの関係が発覚した時に父親に叱ってもらえなかったことが悔やまれ、もう一度父親に厳しく叱ってもらいたいと願っていたからであった。由加里はXと会い、八月二日朝に連れ立ってXの父（七十二歳）や兄（四五歳位）のところに引き結婚したいと相談したが、反対されたので由加里も一旦高知に帰る決心をした。由加里はXの父に四国連絡フェリー乗り場の和歌山港まで送ってもらった。小松島行きフェリーの切符を買って高知に電話を入れたが留守だったので、堺市に住む叔父の家に電話した。叔父の家まで来るように言われたので、遅れてやって来たXの兄と併せて三人で、その日の午後六時頃に叔父の家を訪れた。そこにはYらが待ち構えていた。先ずYが由加里を見るなり右手で左頬を殴りつけ「お前がXと結婚するなら二人とも殺したる」と罵った。そうして、由加里、Xの父親、Xの兄の三人は午後九時頃まで由加里の親戚の人達に「由加里をお前らが隠していたのやろ」、「商売できんようにしたろか」等と罵倒され続けた。午後九時頃由加里の父親がやって来て、突然Xの兄の頭を殴りつけ、足で蹴飛ばした。Xと間違えたことに気が付いて、父親はすぐにXの兄に謝った。由加里は親戚の人達と同じように、父親からも怒ってほしいと思っていたが、父親は由加里を無視するかのように行動したため、由加里は

また失望してしまった。由加里は黙ったままで返事をしなかったり頷いたり、ニタニタと笑っていたりしたため、叔母のYにも「真剣な話をしているのに笑ってるわ」と言われた。午後一時過ぎ、Xの父親に呼び出されたXがやって来て、皆が集まっている奥の八畳間に座らされた。由加里とXのこと、離婚後の子供のこと等について一時間ほど話し合いが続いたが、由加里の異常な行動は目を引いていた。由加里の話すところでは「私」は隣の六畳間から親族会議の開かれている八畳間に居る「由加里ちゃん」を眺めていた。午前〇時（八月三日）を過ぎ、自分で由加里を呼び出しておきながら、「由加里ちゃんが死ぬと言うから仕方無く迎えに行っただ」等と嘘をついていたXも、「由加里をとるのか子供をとるのがどっちかにしろ」と詰め寄られて、「由加里ちゃんとは手を切ります。子供は引き取って養います」と言わざるを得なかった。由加里は「ああ、やっぱり予想していたとおりでヒロピン（Xの愛称）らしい」と思った。それまで、黙り込んでいた由加里が急にクスクスと笑い出した。由加里のただならぬ様子に何人かの人が氣遣う中、由加里は立ち上がり襖を開けて廊下に出てしまった。父親も心配になつて娘の後を追ったが見当たらずまた元の席に戻った。由加里はトイレを終え何気なくナイフを思いついた。由加里に言わせると「凄く喉が渴いていて、あ、ジュースあったわ」という感覚であつた。由加里は少しでも早くその場を終わらせたかった。刃物沙汰になればその場を終わらせることができ、突き刺す相手は「私」でも父親でもXでもよいと思つた。「私」は目の前にいなかったし、残りの二人の席の位置から必然的にXが選れたらしい。由加里は玄関を出てXの車に近づき鍵の掛かっていないドアを開けると車の中の電氣がつき、ナイフの入った鞆が置いてあつたのが見えた。その中に三本ほどナイフがあり、一本を取り出して手に持った。ナイフの刃の中に「由加里ちゃん」の顔が映っておりニコニコと笑っていた。由加里は「由加里ちゃん」があまりに楽しそうなので「何、楽しいのやろ」と思った。その瞬間から由加里は全く記憶を失つてしまふ。次に由加里が記憶を取り戻すのは、誰かに叩かれ押さえつけられ「じっとしてなさい」と言われた時であつた。その間「由加里ちゃん」はナイフを手に持ち真っ直ぐに八畳間に向かい仕切りの襖を開け目の前にうなだれているXの背中を目掛けて一気にナイフを突き刺した。Xは「あつ」と叫び背中をのけ反らせ後ろを振り向きながら「由加里」と言つた。倒れたXの背中にナイフが刺さっているのに氣付いて、その場にいた全ての人は騒然となつた。親戚の一人が由加里の顔を叩き「馬鹿」と怒鳴りつけた。遅れて事情を知つた父親も由加里の顔を殴りつけ、「人を刺すんなら何でお父ちゃんを刺さんがな」と叱りつけた。由加里は顔

を殴られやっとなら返って周囲のことがばんやりと知られるようになった。誰かに押さえつけられ「じっとしてなさい」と言われた。その人をよく見ると父親であった。この時由加里は父親が生まれて初めて自分を受け入れてくれたという喜びを感じた。やっとなら父親と目が合い自分のことを見てくれたことが嬉しかったと言う。「由加里ちゃん」がXの何処を刺したのかも、どの程度の怪我なのかも分からなかった。その後由加里は通報で駆けつけた警察官に逮捕され、その警察官から、Xの怪我が命に別状ないものと教えられて安心した。そして犯行をなしたのは自分ではなくて「由加里ちゃん」だと供述したために簡易精神鑑定を受けることになった。

（鑑定診断と処分）このような事案について次のような簡易鑑定診断がなされた。「患者は犯行時多重人格症状を呈していた。鑑定時多重人格病状は消失し、思考の軽度の連合や弛緩の風変りな会話、途絶様の思考障害、奇異な行動、感情の不適切さや両価性、疎通性の不十分さ、病識の貧弱さ、意志の薄弱性や抑制力の乏しさ等の人格偏倚、社会的な孤立、傷害事件に対する反省や自覚の乏しさ、極度の現実感の喪失（離人病状）や不安感等が見られ、過去に明確な精神病様のエピソードを欠くが、精神分裂病が疑われた。しかし、患者は過去に治療や入院を必要とするほど顕著な精神病状を持たず、思考や感情や意欲の障害の程度の見方によっては分裂病型人格障害ととれる。また、患者には父方母方双方の親類に分裂症を含む多数の精神障害者が存在している。患者は犯行時極度の不安緊張下に置かれ最後には継続的な典型的な二重人格の病状を現し、その精神生活の全てが第二人格の『由加里ちゃん』によって占められて犯行がなされたものである。犯行中の行為の殆どについて健忘を残しており、犯行時ヒステリー性朦朧状態にあった。鑑定時二重人格の病状は消失し、顕著な精神病状は見られず軽度の思考障害や離人症状や人格偏倚がみられた。」

この鑑定に基づき被疑者は責任無能力を理由として不起訴処分となり、精神保健指定医の診察後、精神病院に措置入院となったが、六カ月の入院を経て退院した。

この事件は、わが国の刑事事件で、最初に多重人格が問題とされた事例として重要である。その意義は、初めて鑑定上、多重人格であるという診断がなされたことである。そしてそれに基づいて責任無能力であると判断され、検察

官によって不起訴処分とされたという結論も重要である。ただ初めての事例ということもあって、多重人格と刑事責任能力との関係についての詳しい検討はなされなかった。鑑定人自身も責任能力について「あまり深く検討することなく、それも患者の立場に少なからず同情的であつたこともあり、健忘即ち意識障害即ち心神喪失の公式を反射的に当てはめてしまったことも事実である」⁽⁸⁾と述べている。そしてアメリカにおけるいわゆる「行為時人格アプローチ」⁽⁹⁾の立場が有力であることを紹介して「問題は果たして副人格の『由加里ちゃん』が弁別能力と統御能力を十分に保持していたかどうかであるが、これを鑑定するのは非常に困難なことのように思われる。多重人格そのものが少ない上に、その司法鑑定に係わることも稀な事態であるため、現在のところはケースバイケースで対応していかざるを得ないであろう」⁽¹⁰⁾としている。この事例については健忘の側面に注目して判断がなされたことが興味深い。しかし主人格の健忘と副人格の関係については、鑑定人自身も認めるように十分に検討されているとはいえない。初めの内、由加里は「由加里ちゃん」の行動を認識（観察）しており、ある程度それを制御できた可能性もありえよう（また実行行為についても原因において自由な行為の理論の適用の可能性が検討されるべきかもしれない）。本件は簡易鑑定事例であり事実関係についても十分な検証がなされていないので、断定的なことはいえないが、いずれにせよ多重人格が刑事司法上問題となりうるということを示したということで先例的価値は認められよう。

(二) 連続幼女誘拐殺害事件

（事案）被告人は、第一審の事実認定によれば、①昭和六三年（一九八八年）八月二日にA（当時四歳）を誘拐して殺害し、死体を陵辱して損壊したうえ、その場面をビデオ撮影し、②同年一〇月三日にB（当時七歳）を誘拐して殺害し、③同年一月九日にC（当時四歳）を誘拐して、全裸にして性器を中心にして写真を撮ったうえ、殺害し死体を山中に遺棄した。その後、これらの事件報道を注視し、同月にAの母親及びCの父親宛に犯行を告知する旨のはがきを出し、Aの遺骨を持ち帰り、頭蓋

骨を破砕したうえ遺体を焼き、段ボール箱に入れて翌平成元年（一九八九年）二月にA宅に届け、Aの母親および朝日新聞社宛に「今田勇士」名で同月に犯行声明文と翌月に告白文を郵送した。さらに④同年六月六日にD（当時五歳）を誘拐して殺害し、死体を自室に運び込んで陵辱して損壊したうえ、その場面をビデオ撮影等し、さらに頭部、両手足部をバラバラにして遺棄した。最後に⑤同年七月二三日E（当時六歳）を誘拐して全裸にする強制わいせつを行った。

弁護人は犯行事実は争わず、被告人の誘拐および殺人の犯意を否定すると共に、その責任能力について争った。

（各鑑定の要旨）被告人は、捜査段階で①簡易鑑定、公判段階で②保崎らの共同鑑定、③内沼・関根鑑定、④中安鑑定を受けた。鑑定結果は分かれ、①②は被告人は人格障害に止まり完全責任能力を有するとしただけに對し、③は解離症状を主体とする反応性精神病に、④は精神分裂症（破瓜型）に被告人は罹患してしており、心神耗弱であったとした。これらの鑑定は判決理由の中で、その要旨が引用され、詳細な検討が加えられている。⁽¹¹⁾以下では各鑑定の要旨を示しておく。⁽¹²⁾

① 簡易鑑定（診察日は平成元年八月二四日）⁽¹³⁾

（一）診断結果

精神分裂病の可能性は全く否定はできないが、現在の段階では人格障害の範囲と思われる。

（二）理由の要旨

（i）被告人は、表情が乏しく、応答が寡言で遲滯するが、話題によっては比較的円滑に応答し、自ら説明するときは雄弁となるところもある。この点は質問によって反撃するとか、考えながら応答する。また、同一内容の質問に対して応答内容が全く変化するなどから、極めて防衛的であるとともに攻撃性が著しいと解される。

（ii）問診の過程で、当初異性に對する性的な興味は全くないとし、犯行後の被害者に対する性器のいたずらも、女性性器に関する知識を得るためと一見異質と思われる理由を述べたが、再質問では成人女性の性器に興味があること、正常な性行為を欲する気持ちのあることを述べ、思考伝播体験については、再質問では否定した。また、注釈関係妄想に相当する体験は小学校当時から不変であると述べるが、分裂病では通常その年代では起こり難いこと、結果的には上肢の運動障害に起因する精神的外傷、劣等感に帰着し、了解可能性が感じられること等から、仮にその体験が真実であったとしても、分裂病を直ちに

診定するのは相当でないと思われる。

(iii) 被告人は、生後面上肢に運動障害が認められ、幼児より深刻な精神的苦痛を伴い、精神的外傷となっており、このことが交友や生活態度にも影響を与え、非社交的、自閉的傾向を持つ人格を形成するとともに、深い劣等感、対人不信感から攻撃性も醸成されている。これらは、発達上、性的成熟にも重大な影響を与え、女性との通常の異性関係を断念して映像や雑誌に関心を集中させているが、成長するに及び次第に実際の女性に触れることを求め、本件の動因を形成したと思われる。本質的な性倒錯は認められず、性的処理は自慰に集約され、自己愛的であり、このような性的関心の中で、成人女性の代替として相手にしやすい幼児を自己の性的欲動を達成するために殺害していると思われる。その後の行為も極めて非情なものとなっている。この点は、前記成育史上の人格の発達障害として情性の著しい未熟が挙げられる。被告人は、小動物に残酷と思われる行為が年少時から指摘されており、本件についても簡単にそれらの行為を重ね、深刻な悔悟、内省もみられない。

(iv) 以上により、被告人につき敏感関係妄想様の態様は否定し得ず、分裂病を最終的に否定することもできないが、現在認め得る所見からは、人格障害の域にあるものと思料される。

② 保崎ら共同鑑定（鑑定期間は平成二年二月一日から平成四年三月三十一日まで）⁽¹⁴⁾

(一) 鑑定結果

被告人は、本件各犯行時、極端な性格的偏り（人格障害）はあったが、精神分裂病を含む精神病様状態にはなかった。

(二) 理由等の要旨

(i) 被告人は、元来知的には問題なく、性格はクレッチマーのいう極端な分裂気質ないし分裂病質に相当し、非社交性、自己中心性、空想性、顕示性、未熟、過敏性、易怒性、情性欠如の傾向が目立っていた。さらに生来性の両側橈尺骨癒合症に関する劣等感が強く被害的になりやすく、そのために成人女性に対する興味はあるものの交際はあきらめていた。

(ii) 犯行当時は、右(i)の状態に加えて性的典味が幼女に向けられ、収集癖と相まって犯行に及んだものと思われる。

(iii) 右(ii)の状態は、極端な性格的偏り（人格障害）によるもので、精神分裂病を含む精神病様状態にはなかった。したがって、本件犯行当時、被告人は物事の善し悪しを判断し、その判断に従って行動する能力は保たれていたと思われる。

(iv) 現在の被告人の精神状態は、右(i)の状態に加えて、拘禁の影響が強く現れている状態で、無表情、無愛想で、簡単なことも分からず、一見退行したように見える面と、事態をかなりは握しているように見える面が混在し、家族や犯行の動機状態について、独自で奇妙な説明を行っているが、これらの供述は逮捕後になされたものである。この状態は、精神分裂病も疑うものであるが、総合的に見れば拘禁反応によるものと考えるのが妥当であり、現時点では精神分裂病は否定されよう。したがって、被告人の現在の精神状態は、物事の善し悪しを判断し、その判断に従って行動する能力に多少の問題はあるとしても、著しく障害されている程度には至っていない。

③ 内沼・関根鑑定（鑑定期間は平成四年二月一日から平成六年一月一二日まで）⁽¹⁵⁾

(一) 鑑定結果

被告人は、犯行時、手の奇型をめぐる人格発達の重篤な障害のもとに敏感関係妄想に続く人格反応性の妄想発展を背景にし、祖父死亡を契機に離人症及びヒステリー性解離症状を主体とする反応性精神病を呈していた。

(二) 理由等の要旨

(i) 被告人は、乳児期から神経質な子であったが、手の奇型をめぐる恥辱的体験から地元の仲間が集まる狭い環境の中で著しい被害関係妄想を發展させており、敏感関係妄想の概念規定に当てはまる。

(ii) 家族は解離状態にあり、孤獨な被告人の心の支えにはならず、唯一の支えは解離性家族から浮き上がった祖父であった。被告人は、高校以後、分離・自立への要請が求められていくが、新たな社会環境に適応していくために不可欠な、安定した人間関係を形成するため人格発達の基礎固めができていなかったため、かえって退行を促し、かつての不安のない懐かしい早期の生育史の時期に戻りたいという願望を強く抱かせるとともに、分離・自立への不安を背景にして極めて幼児的な収集強迫が強まってきた。ますます真の人間関係の形成から遠ざけられることとなったのであり、敏感パラノイア、願望パラノイア、好訴パラノイアと同じ傾向が認められ、人格反応的な妄想発展の流れが認められる。また、被告人はもともと解離症状を起こしやすく、長い生活史の間に分割の機制が培われた。

(iii) このような長い生活史にわたる人格の異常発展の中で、一心同体幻想で自らの心の支えにした祖父を失ったとき、潜

在していながらも徐々に高まる迫害的不安が一気に噴出したもので、被告人は、祖父の死を契機として、迫害妄想、幻視、幻聴を急激に顕在化させており、反応性精神病と診断でき、その病像は、迫害妄想、幻視、幻聴を伴うが、なによりも目立つのは、離人症、二重身、フーグ（遁走）、生活史健忘、人格変換、解離性同一性障害（多重人格）、ガンゼル症候群といった多彩な解離症状である。

(iv) 被告人が他人にさまざまな顔を見せていること、人格変換を起こしやすいこと、別人の存在を認めていることなどから、被告人に解離症状としての解離性同一性障害（多重人格）を認め得る。A子、B子、C子、D子の誘拐被害は、被告人の供述を額面どおり受け取れば、夢幻様の意識変容化における被害者との「一心同体」、「相手性のなさ」とその破綻による憎しみの噴出に基づく衝動的殺人ということになるが、右各犯行には、被告人の別人格である、ペドフィリア的・ネクロフィリア的な倒錯的嗜癖を持った「今田勇子」が関与したと思われるのであり、被告人の場合、一つの人格は衝動的殺人犯であり、他の人格「今田勇子」は計画的殺人犯である。

(v) 被告人は、解離性家族を背景にして四歳から始まる敏感関係妄想に続く人格反応性の妄想発展の流れが歴然として認められ、唯一の支えであった祖父の死を契機として、さらに別種の反応性の精神病状態に陥り、自由な自己決定の可能性が制約されるに至ったことは明らかであり、被告人は犯行時善悪是非の弁識能力もその弁識に従って行為する能力もともに若干減弱して、完全責任能力を求めるのは無理ではないか（心神耗弱）と考えられる。

(vi) 被告人は、鑑定時、引き続き同様の精神状態にあると診断される。⁽¹⁶⁾
④ 中安鑑定（鑑定期間は平成四年一月一日から平成六年一月十九日まで）

(一) 鑑定結果

被告人は、本件客犯行時、精神分裂病（破瓜型）に罹患していた。

(二) 理由等の要旨

(i) 現在における被告人の精神状態は、本件各犯行以前に発する精神分裂病（破瓜型）、収集癖と、本件各犯行以後に生じた拘禁反応の三者によって構成されたものである。

ア 第一の精神分裂病（破瓜型）は、高校時代かどんなに遅く見積もっても印刷会社退職以前に極めて潜在的に発病したものであり、その後は、一方では集中力及び意欲の低下、感情鈍麻（殊に情性欠如の形で）、易怒性ないし攻撃性のこう進が徐々に進展するとともに、他方では注察念慮、関係・被害念慮、被注察感が断続的に出没していた。昭和六三年五月の祖父の突然の死は、被告人にいささかの心理的動揺を与え、この時期には易怒性ないし攻撃性のこう進が強まり、これは家族・親せきに対する暴言・暴行となって現れ、また、情性欠如と相まって動物虐待が頻発するようになった。しかし、分裂病が明確に増悪したのは、前鑑定終了後から本鑑定開始前の間であり、この時期になって初めて、家族並びに不明の他者に対する被害妄想（家族に対するものは妄想追想として）、被注察感（様相が変化し、持続的）、幻声（迫害的内容・対話傍聴型）などからなる幻覚妄想状態が顕現するに至ったものである。

イ 第二の収集癖は正確な時期は不詳ながら祖父死亡の数年前に発し、祖父死亡後にこう進したものであるが、それは祖父や父と同様の生来性の性癖と考えられた。

ウ 第一の拘禁反応は、簡易鑑定終了後より前鑑定初期の間（平成元年八月二四日ないし平成三年二月一三日）に発病したものであり、本件犯行の認否ばかりでなく、祖父の死の否認、両親の認否にも及ぶ現実認否・願望充足性と妄想追想（本件犯行に關して）及び妄想と幻覚（祖父の死の認否、両親の認否に關して）を呈したものである。

エ 以上のうち、収集癖は、拘置所という限定された状況においてもなお持続しており、また、精神分裂病（破瓜型）と拘禁反応はなお増悪・進展しつつある。拘禁反応はそれ自体として妄想・幻覚化したものであるが、基底にある精神分裂病（破瓜型）の増悪に伴って、より一層の妄想・幻覚化が促進されていると判断される。

(ii) 本件各犯行は、各々どの段階まで進展したのかという点で互いに異なるとはいえ、誘拐、殺害、死体損壊・遺棄へと段階的に犯罪行為が付け加えられて成立したもので、主要な犯行のすべてが、「女性性器を観察したい」という性的欲求と、「自分だけが所有するビデオテープを持ちたい」という（収集癖に基づく）収集欲求を動因とし、情性欠如を抑止力低下の原因として成立したものと考えられた。

ア 「女性性器を観察したい」という性的欲求は、すべての事件に共通する誘拐行為の動因と判断されたが、殺害行為の動因

とも考えられ、B子事件（少なくともC子事件）以降の殺害は、右性的欲求を容易かつ十分に行うために誘拐の当初より計画されていたものと判断された（A子の殺害のみは、易怒性ないし攻撃性のこう進によって突発的になされたものと判断された）。「自分だけが所有するビデオテープを持ちたい」という収集欲求は、突発的に行われたB子の殺害の後に生じてきたものと判断され、これはB子事件（少なくともC子事件）以降の誘拐、殺害に対しては、右性的欲求に重なる作用したものと思われる。「自分だけが所有するビデオテープ」の内容についての被告人の関心は、A子事件においてはまだわいせつ行為のみであったが、D子事件においてはそれに死体の切断行為あるいは切断された死体が付け加わり、よって死体損壊が行われたものと判断された。

ウ 一方、情性欠如は、当該行為が倫理的に許されることか否かという情的判断に障害をもたらし、各動因の行為化に抗する抑止力の低下をもたらしたものと判断された。ただし、抑止力の一方である、当該行為が社会的に許されることか否か（犯罪行為に該当するか否か）という知的判断は保たれており、この知的判断の残存ゆえに、後に、「犯行に対する自己の不関知」をその具体的内容とする現実否認・願望充足性の妄想追想が生じてきたものと思われる。

エ 本件各犯行時には、被告人は既に精神分裂病（破瓜型）に罹患していたと考えられたが、当時存在した分裂病症状の本件各犯行への関与は、易怒性ないし攻撃性のこう進が動因のごく一部として、また、情性欠如が抑止力を低下させたものとして認められたに過ぎない。動因のほとんどを占める前記性的欲求と収集欲求は、分裂病に関するものでも、また、他のいかなる精神疾患に関連するものでもなく、それ自体は正常の心性に属するものであると判断された。

オ 以上の考察を通して、鑑定人は、被告人は本件各犯行当時においては是非善悪を弁別する能力はほとんど完全に保たれていたが、行為に対する制御能力の一半に欠けるところがあったと判断する。司法精神医学的にいえば、これは広く心神耗弱に相当するものであるが、免責される部分は少ないと考えられる。

（判旨） 被告人の捜査段階での供述は、「被告人が捜査官から厳しい取調べを受けて供述した面があることは否定し難いにしても、被告人が自ら体験し記憶している事実を基にし、その中で犯情が悪質と見られる要素をできる限り否定して自己の刑事責任の軽減を図ろうと意図をも交えつつ、自らの判断で述べたものと認められるものであって、被告人の右意図に出た部分を除

き、被告人がその体験した事実を語ったものと言うべきであり、これに反する被告人の公判段階における供述は、被告人が犯行当時の体験を語ったものとは到底思われぬ」ということから「公判段階における供述をそのまま犯行時の体験として理解する立場に立」つ③の内沼・関根鑑定は、その基本的前提が不当であり、またそれが指摘する反応性精神病の病像の説明に疑問があり（表1参照）、祖父の死亡を契機としてそれらの反応性精神病を呈したとの見解にも次のような疑問があるとした。すなわち「内沼・関根鑑定は、被告人は、祖父の死亡を契機として、迫害妄想、幻視、幻聴を急激に顕在化させ、離人症・二重身、フーグ（遁走）、生活史健忘、人格変換、多重人格、カンゼル症候群といった多彩な解離症状を示したとするが、かりにそうであるならば、被告人の日常生活において、祖父の死亡後、それ以前には見られなかった病的に異常な言動が容易に観察されてしかるべきであろう。しかし、祖父の死亡に接して見られた被告人の動揺としては、

① 祖父の死亡直前に友人のRに電話をし、『死にそうだから来てくれ。病院のおじいちゃんをビデオに撮りたい。死ぬ前の姿を写して欲しい』と、気が動転した様子で依頼したこと、

② 祖父が入院先の病院で息を引き取り、家族らが祖父の身体をふくなどした後、帰宅しようとした際、被告人が携帯していたバッグからテープレコーダーを取り出して、録音した飼いの犬のペスの鳴き声を聞かせたこと、

③ 祖父の死後、生前の祖父の姿を撮影したビデオテープを集めた親せきに見せたこと

が指摘される程度であり、右のうち①②は、やや特異ではあるが、いずれも被告人の祖父に対する愛着を示すものであって、了解可能である。また、家族等に対する暴言、暴行や動物虐待もみられるが、これらは、前述のとおり、祖父の死亡後に発現したものではなく、もとからあった被告人の性格傾向の現れとみられるのであり、いずれも、病的に異常な言動とは思われぬ。したがって、被告人が祖父の死によって影響を受けたことは否定し難いが、反応性の精神病を呈するほどの精神的衝撃を受けたとは思われぬのであり、この点からも、内沼・関根鑑定の結果は採用できないのである。中安鑑定も、①②③の出来事を指摘し、祖父が脳いっ血で倒れた昭和六三年五月二日以降、死亡した五月一六日を含んで前後一、二か月間に認められた行動異常はそれしなく、祖父の突然の死は被告人にいささかの心理的動揺を与えた程度のものであり、被告人が述べ立ててい

るような大きな精神内界の変化があったということではないとしている⁽¹⁸⁾のである。

表1 内沼・関根鑑定の指摘する被告人の反応性精神病の病像とそれに対する裁判所の判断⁽¹⁹⁾

病 状	内沼・関根鑑定の指摘する被告人の病像の説明	裁 判 所 の 判 断
<p>離人性（感情消失）</p> <p>祖父再生と「真」の両親への願望、妄想、もらい子</p>	<p>被告人は、祖父の昏睡状態を見て、「わあーっ」という激しい気持ちの動揺を経て、その日かその翌日、気が付いてみたら、感情がすっぱり抜け落ちてしまい、現在もその状態が続いている。被告人には、喜怒哀楽の感情を喪失した感情疎隔感、自己疎隔感（自己所属性喪失感）、自己同一性喪失（本来の感じがない）、実行意識喪失感（自分の意思で行動しているという実感を伴わない）、自己身体自己所属感喪失（自分の体が自分のものでないといった感じ）、身体感情喪失感（体の感じが分らない）、外界疎隔感（周囲が薄ぼんやりする）、親和性喪失感、自己身体喪失感（手足がなみみたいな感じ）、体感異常、時間体験異常（時間が定まった感じ）、空間体験異常（周囲の物が九割くらい小さく見える）、満腹感・空腹感の喪失がみられ、重症離人症であったといえる。</p>	<p>内沼・関根鑑定の指摘する離人症については、被告人が祖父死亡後、殊更呆然とした生活状況であったことはうかがわれず、重症離人症であったことには疑問があるし、二重身体験や「不思議な力を持った奴」の存在の訴えについては、保崎ら共同鑑定の後になって述べられたことであり、被告人が公判段階に至り自己の犯行を否定していく合目的な変化の延長上にある説明といえる。</p> <p>同鑑定の指摘する症状のうち、保崎ら共同鑑定の検討において述べたとおり、祖父再生への願望および祖父の幻視と幻聴については、被告人が祖父をしのび、現れてもらいたいとの願望を持つにいたることは理解で</p>

<p>妄想、祖父の幻視と幻聴、黒い影の幻視</p>	<p>被害関係妄想と幻聴</p>	<p>二重身（自己像視）</p>
<p>面親がどこかにいるのだという想念が浮上し、自分はおもらされたか拾われたに違いないと直証的確信を抱くに至っている。祖父の死を否認し、ある日、こつぜんと祖父の姿と黒い影の幻視が出現し、祖父が「もうすぐ見えるようになるからな」などと言うという幻聴を伴っている。被告人は昭和六三年の後半から逮捕されるまでに四回くらい「おじいさんが戻ってきたら骨がダブってしまう」との考えのもとに、祖父の元から祖父の遺骨を取り出して会っており、祖父再生への願望妄想を抱いていた。</p>	<p>被告人には、祖父死亡を契機として、家族否認に伴う被害者意識、親せきからの迫害、見知らぬ人たちに対する被害関係妄想、「不思議な力を持った人たち」による迫害（「さわさわ」という音と、それに混じって「M（被告人の名前）」「リンチ」という声が聞こえる幻聴）といった被害関係妄想が噴出ししている。</p>	<p>被告人は、ビデオテープの大量万引きの際、もう一人の自分が前方に現れて万引きをし、本来の自分は「どっさんどっさん」しながら見ているとの二重身体験があり、本件各犯行時に頻繁に二重身体験が出現してい</p>
<p>きるのであって、また「真」の両親への願望妄想およびもらい子妄想についても、被告人は印刷会社退職後ころから、家族らに対する乱暴な行為が目立ち、捜査段階において、手の障害を放置したことにつき両親に対する不満を述べ、特に父親に対し反発をみせていたのであり、本件各犯行の発覚と拘禁を契機とし、現在の自分の苦境は結局のところ手の障害を放置した両親のせいだなどとして、両親に対する敵意を強めていくことは十分に考えられるのである。</p>	<p>被害関係妄想と幻聴については、中安鑑定の検討において述べたとおり、手の障害等の起因する両親にたいする強い敵意が基調となつて家族および親戚への被害妄想が生じ、それが拘禁状態の下で「不思議な力を持つ者」らへの被害妄想へつながっており、前者はそれなりに了解可能なものであり、後者は拘禁反応によるものである。</p>	

	収集強迫	家族否認（生活史健忘）
<p>る。たとえば、独りぼっちの子と出会った際にもう一人の自分が現れて前を歩いて行くとか、A子及びD子の遺体を陵辱した際、もう一人の自分が現れて解剖行為をやったりビデオ撮影をしたりとか、D子の遺体を切断した際、もう一人の自分が冷静にやっていたとか、被告人のいう「肉物体」や「骨形態」に関連して二重身体験がある。</p>	<p>被告人には既に祖父死亡前から収集強迫（そう的防衛が加わって快楽性を帯び、嗜癖に近いが、根底に喜びの実感のなさがあった。）がみられたが、祖父の死亡後、逮捕されるまでの間に被告人が収集したビデオテープの量は四〇〇〇本に達しており、空しい快楽性の根底に流れる実感の乏しさが祖父の死を契機に顕在化したもので、被告人は、強迫症状に対する抵抗をほとんど失った状態に陥っている。</p>	<p>被告人は、祖父死亡後、家族を同居人とみなし、祖父死亡前、どうして本当の両親や妹と思っていたのか不思議だと語っているが、生活史健忘の回復過程の病像とそっくりであって、生活史健忘の特殊型ととらえられる。</p>
		<p>家族否認（生活史健忘）を含め、こうした妄想等が祖父の死後に生じていたとするならば、被告人は家族らに対し、自分は他人であるとの態度や言動を示すのではないかと思われるが、そのような形跡は見られない。例えば、被告人の母親に対する証人尋問において、被告人が母親に対し、「私は別にピアノのけいこ</p>

<p>群 ガンゼル症候</p>	
<p>また、被告人にはガンゼル症候群の外的外れ応答がみられ、自宅近くの御嶽神社付近に捨てたD子の頭がい骨を見に行き、白骨を祖父だと「びん」と感じ、白骨</p>	
<p>同鑑定の指摘するガンゼル症候群については、保崎証言によれば、被告人は、的を外しながら、大事なことは否定しながら、合目的な方向に持っていく傾向が</p>	<p>とか行きたくないのに、…自慢したがって、私を行かせたと思うんですよ。だから、M、今日もよく行ってきてうれしいねとあと私が洋服とか別に欲しいとも、急に買って、人を着せ替え人形のように着物を着せて、自分だけ宣口んでいるんですよ。この人は…自分がえもん掛けとか、着せ替え人形のような扱いを受けているような気がして、親とは思えないというんじゃないくて、親じゃないんじゃないかと、そういうふうに思うんですよ。私は」などと述べたのに対し、母親は、「家で、パパとか私のことをチャーチャンとか小さいころから言っていた。被告人から『この人』と言われたのは今日が初めてである」旨証言しており、右の問答からも、被告人が祖父の死亡後も両親に対し親子として接していながら、拘禁後に次第に両親を否定していく過程を見とることができる。なお、被告人は、E子事件で逮捕された平成元年七月二三日の朝、友人のRを誘いに行ったとき、「妹に車を教えてくれ」等と言っていたというのであり、当時被告人が妹を否定していた形跡もみられない。</p>

	<p>フーグ（健忘を伴う遁走状態）</p>
<p>（祖父）と一緒にドライブして吉野街道わき山林などに置いて、「またドライブしようね」と別れの言葉を告げており、祖父の白骨を火葬場で見ることができなかった無念の思いが白骨と祖父を同一視させたものと理解し得るが、これはガンゼル症候群の的外れ応答と等価とみなすことができる。</p>	<p>被告人は、祖父死亡後、どこで入手したか分からないビデオテープがどっさり自動車のトラックにあるのを知って驚いたとか、値札の付いた目新しいビデオテープが知らないうちに自室にずらりと並んでいるのに気付いて以外の思いに襲われたとか、親せきが来訪するとリンチに遭うと恐れ、気が付いたら街中にいたとか、本件客犯行時も「ネズミ人間」が出現後、はっとしたら家の玄関に車でついていたとか、フーグが頻繁に見られる。</p>
<p>あり、意図的な感じがあって、素直にカンゼル状態とは言いが切れないというのである（前述のとおり、被告人は、公判廷においても、例えば、「A子遺骨焼証明鑑定」の最初の語を「A子」と読まずに「しんり」と読んだり、「今田勇士」を「いまだゆうこ」と読まずに言まず、「いまだいさこ」と読んだりするなど、検察官からの質問に対し殊更的を外した応答が見られる）し、D子の頭がい骨を祖父のものと思ったなどの被告人の供述は、被告人がD子の殺害及び死体遺棄を否定していく合目的な変化の延長上にある説明であって、ガンゼル症候群と等価と解することには疑問がある。</p>	<p>内沼・関根鑑定がフーグとしてしてするものの多くは、被告人が一定の目的に沿ったひとまとまりの行為の一部について記憶がないと述べるところをいうもので、フーグとみるには疑問がある。例えば、同鑑定は、被告人は、「ネズミ人間」の出現後おっかなびっくり飛んで帰り、気が付いたら家の玄関にいて、この間の行動についてわずかに断片的な記憶しかなく、右症状はフーグであるとするが、被告人は、D子を殺害後遺体を縛って車で運搬し、途中、レンタルビデオ店に立ち寄り、ビデオカメラを借り帰宅し、自室で同女</p>

の遺体を陵辱してその場面をビデオカメラで撮影し、その翌日、レンタルビデオ店にビデオカメラを返却したものであるところ、そのうち、被告人がE子の遺体を自宅に持ち帰ったのも、その途中でビデオカメラを借りたのも、いずれもその後に同女の遺体を陵辱してビデオカメラで撮影したことに向けての行為であって、前後の行為と断絶する部分は全くなく、被告人がそのような一連の行為の一部分を覚えていないと述べたからと言って健忘を伴う遁走とみるのは疑問である（しかも、被告人は、D子殺害後の経緯につき、道を探しながら帰ったが、途中、中野サンプラザ付近の店でビデオカメラを借りたとか、遺体を部屋に運び込んだとか述べており、被告人の右供述自体、少なくとも、D子殺害後の経緯の大筋につき記憶があったことをうかがわせるものである）し、被告人は、「ネズミ人間」が出現して恐ろしくなり分からなくなったと述べたため、その後の行動が分からない旨述べているに過ぎないのではないかと思われるのであって、フーグとして理解するには疑問がある。なお、同鑑定は、フーグを示す事実として、被告人がC子の遺体をラングレイで運搬中、側溝に脱輪させたにも関わらず、その事実を覚えていないことを強調するが、被告人は、捜査段階では右脱輪の事実を供述していたし、公判段階

		<p>に至っては、全般にわたって覚えていないとの主張が基調となつていたのであつて、鑑定の間診において被告人が覚えていないと述べたからといってそのまま信用することはできないのであり、前述のとおり、保崎ら共同鑑定の問診においては、被告人は、「車がガクンとなつて止まった」、「どぶか溝が分からないがぐつとなつて」と述べており、脱輪の認識があることがうかがわれるのであるから、内沼・関根鑑定の右指摘には疑問がある。</p>
<p>人格変換（多重人格）</p>	<p>被告人は人格変換を起こしやすく、例えば被告者の幼女に出会った瞬間に人格変換を起こして、自ら幼児に変ぼうしている。被告人が、他人にさまざまな顔を見せていること、人格変換を起こしやすいこと、「自分が自分であつたころを懐かしく思う自分」と「冷静な奴」の二つの別人の存在を認めていることから、被告人に解離症状としての多重人格を認めることができる。そして、被告人は、この二人の別人格を自分に入れたのは「不思議な力を持った奴」で自分の中にあると言つて、第四の人格の存在をばく然と感じており、その第四の人格とは、本件各犯行に関与したペドフィリア的・ネクロフィリア的な倒錯的嗜癖を持った「今田勇士」であつた（ただし、関根証言によれば、犯罪</p>	<p>内沼・関根鑑定の指摘する人格変換（多重人格）については、これを本件各犯行に即してみたととき、そもそも同鑑定が前提とする本件各犯行等に関する被告人の公判段階における供述が真実犯行時の体験として存在したものではないことは前述のとおりであつて、同鑑定はその前提を欠く上、本件各犯行はいずれも性的欲求の充足という目的に沿つた性犯罪であつて、被告人のかねてからの性的関心に照らして矛盾はなく、犯行の経過にも一貫した流れがあり、被告人に人格変換が生じていることをうかがわせる形跡は見当たらないのであり、固様の事態が四度も繰り返されているといふことにも照らすと、本件各犯行時に被告人に人格変換が生じていたとは到底思われなない。また、祖父死亡</p>

に直接関係した人格、鑑定面接のときに出会った被告人、幼児のときに帰りたいと願望している人格の三つの人格を考えているという。

後、被告人の日常生活において、周囲が被告人につき別人格の出現に気付いてこれを指摘したような形跡は見られないし、本件捜査段階及び公判段階においても、被告人につき別人格の出現が気付かれた形跡があるとは認められないのである。内沼・関根鑑定は、被告人が、保崎ら共同鑑定の鑑定人の一人である皆川鑑定人に激しい調子の鑑定拒否文を書き、その後これを覚えていない旨述べていることを指摘して、右鑑定拒否文を書いた際に別人格が出現した可能性を示唆するが、被告人は、同鑑定人の問診において、同鑑定人が被告人の供述内容に疑問を呈したことに反発し、平成三年二月一三日、右鑑定拒否文を書いたことがうかがわれるところ、保崎証言によれば、被告人は、その後、保崎鑑定人に対し、皆川鑑定人らの除外を申し入れたが、その際には同鑑定人に鑑定拒否文を書いたことを述べており、同鑑定人に鑑定拒否文を書いた被告人の人格と保崎鑑定人の問診にに応じていた被告人の人格が別人格とは考えられないというのであり、実際にも被告人はその後皆川鑑定人の問診を拒否して、その態度は保崎ら共同鑑定の間を通じて一貫しているのであって、被告人が皆川鑑定人に対し鑑定拒否文を書いたときに別人格が出現していたとは思われない。

さらに④の中安鑑定についても「本件一連の犯行における被告人の行動は、それなりに了解可能なものであり、」被告人の犯行後の行動の「経過は通常人としてよく理解できるものであり、精神分裂者が凶悪な犯行を犯し、且つ、拘禁されている状態とは思ひ難い」等として採用できないとした。⁽²²⁾これに対し、②の保崎らの共同鑑定には疑問がなく、結論として「被告人は本件犯行当時、性格の極端な偏り（人格障害）以外に反応性精神病等を含む精神病様状態にはなく、したがって事物の理非善悪を弁別する能力及びその弁別に従って行動する能力を有していたと認められるのであり、被告人については完全責任能力を認めるのが相当である」とし、死刑判決を言い渡した。

まず判決は、三つに分かれた鑑定意見の内、保崎らの共同鑑定のみを正しいものとして採用している。確かに責任能力の判断は、法律判断であり、心神喪失または心神耗弱に該当するか否かおよびその前提となる生物学的、心理学的要素については、裁判所の評価に委ねられるべき問題であり、鑑定に拘束されないとされる。⁽²³⁾しかし本件のように鑑定意見の結論が分かれた場合に、全く自由に都合のよい結論を導き出すために鑑定を選ぶことができるわけではないように思われる。この点に関し、最近林美月子教授が、鑑定前提の問題と鑑定判断（診断）の問題を区別され、後者について鑑定が分かれた場合については、被告人に有利な方を採用すべきであるとの主張されていることが注目される。⁽²⁴⁾そこで検討されるべきは裁判所が排斥した鑑定の前提に問題があったかということである。安田助教授は、「本判決が、鑑定資料に問題のある内沼・関根鑑定を排斥したことに異論はないであろう」と⁽²⁵⁾とされているが、この点についても異論がある。まず前提として公判での供述はすべて拘禁反応によるものであるとすること自体に問題があらう。また内沼・関根鑑定は、鑑定資料として、面接の際の供述のみに依拠しているわけではなく、表2で示したような既に事件前から現れていたと思われる事情をも考慮しているのである。これに関し内沼鑑定人は、「拘禁反応説は、取調べに当たった警察官や逮捕された日の翌日から面会している弁護士証言、また祖父の墓が暴かれていたという

表2 生活史と病歴

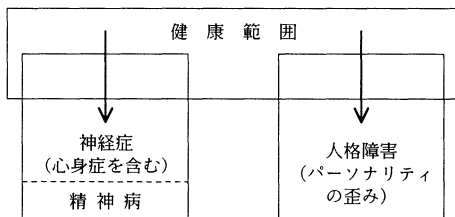
	出生	幼稚園	小学校	中学校	高校	短大	丁印刷	家業	祖父(+)	逮捕
家族の解離性										
被害関係妄想										
“真”の両親・祖父再生への願望妄想										
貰い子妄想										
幼児的フェティッシュと収集強迫										
集中力低下										
奇妙な薬物依存										
離人症（二重身・小視症など）										
フーグ（遁走）										
家族否認（生活史健忘）										
人格変換（多重人格）										
的はずれ応答（ガンゼル症候群）									?	
痛覚減退										
祖父の幻視と幻聴										
黒い影の幻視										
さわさわ音と幻聴										
ネクロフィリア										
ベドフィリア										
セネステジー										
家庭内暴力									時期不明	
病的動物虐待										
幼児的心性（幼児的嗜好）										
好訴性										
生物学的脆弱性（?）										

内沼幸雄「解離現象の精神医学的意義」日本社会医学会雑誌
6巻（1997年）77頁より

弁護士立合いのもとに確認された事実から、致命的な事実誤認にもとづいたものであることが明々白々となりまして⁽²⁷⁾と反論されている。またこれらの被告人の生活史すべてが判決の言うように精神障害の病状ではないと断定できるのか(表1参照)ということについても問題があろう。福島章教授も、裁判所の判断に關し、「しかし、精神医学者の目から見ると、その論理はあまりに形式的で、専門性に対する理解を欠くものであるように感じられる。例えば、捜査段階での供述と鑑定人に対する供述の異同を比較し、前者を基準として後者の信用性を否定したり、多重人格や精神分裂病の診断根拠となった生活史的事実や被告人の行動の評価を、裁判官が素人なりに判断して『病気の病状とは認められない』などとしていることである⁽²⁸⁾」と批判される。またこの点について、浅田教授は「すでに第一回公判における犯意および責任能力の存在に対する疑問についての詳細な指摘からしても、被告人に犯行時すでにかなり重篤な精神異常があったことは否定できないのではないだろうか⁽²⁹⁾」とされる。

以上の指摘から見ても、裁判官の判断には単に前提となる鑑定資料の当否という問題を超えて、特に中安鑑定に対する批判や表1における病状の解釈に見られるように了解可能性を理由として病状の診断についても素人的判断をなしている。しかし最近近藤助教授によつて指摘されているように、「了解の能・不能に診断機能が存在するわけではなく⁽³⁰⁾」、少なくとも福島教授が指摘される通り⁽³¹⁾、後者の点については大きな疑問がある。裁判官の判断は鑑定資料の当否のみならず診断自体にも踏み込んでおり、しかもその判断において浅田教授が指摘されるように「事件の重大性に引きずられた判決という感⁽³²⁾」を否定できないように思われる。そのように考えると控訴審においては以上指摘した観点から各鑑定の採否について再検討がなされなければならず、それを前提とした上で被告人の責任能力についてより厳密な分析が不可欠となろう。判例は、精神病と人格障害を区別し(図1参照)、心神喪失・耗弱が認められるのは前者の場合のみであるということを前提としているかのようにもみえるが、人格障害と解離性同一性(多重人格)障害の

図1 心の不調の2系列



笠原嘉・精神病（1998年）7頁より

三 解離性同一性障害（多重人格）者の刑事責任能力に関する補足

以下、前述の二つの事例を踏まえた上で、多重人格であるとされた場合の責任能力の問題について再検討を行う。⁽³⁵⁾

わが国における二つの事例を念頭にいた上で、前稿で述べたことを補足すべき点は以下のことである。

(一) まず問題となるのは、そもそも多重人格とはすべて詐病ではないかという疑いがある根強いことである。最近のドイツの文献でもこのような見解が主張され、⁽³⁶⁾ また（多重人格の存在を完全に否定しているわけではないが）連続幼女殺人事件判決においても、「被告人の公判段階における供述は意図的な詐言ではないかとの疑いが生じる」と⁽³⁷⁾ され、詐病であると断定する論者もある。⁽³⁸⁾ しかしながらアメリカにおいては解離性同一性障害は、既に診断名として

関係については両者は排斥し合うものではなくPTSD（心的外傷後ストレス障害）と解離性同一性障害と人格障害（特に境界性人格障害）は重なり合う部分が多いことを指摘し、被告人は「さまざまなトラウマと家族の病理を背景として起こった解離性同一性障害とPTSDの合併と考えるのが適切な診断であろう」とする見解もあり、⁽³³⁾ たとえ人格障害であるとしてもそこから直ちに完全責任能力であることが導き出せるかということも検討の余地がある。⁽³⁴⁾ その際、検討課題としては内沼・関根鑑定の鑑定資料（前提）に本当に問題があるのかという点、また特に中安鑑定に対する裁判所の判断はその役割を超えて診断自体に立入ったものではないかという点、最後に保崎らの共同鑑定が前提としている拘禁反応説の妥当性の問題であろう。これらの点について控訴審でより厳密な検討がなされることを期待したい。

確立しており、DSM-IVにおいても解離性障害の一種として次のA乃至Dの病状が認められている場合であるとき
れる。

「A 二つまたはそれ以上、はっきりと他と区別される同一性または人格状態の存在（その各々は、環境および自己について知覚し、かわり、思考する比較的持続する独自の様式を持っている）。

B これらの同一性または人格状態の少なくとも二つが、反復的に、患者の行動を統制する。

C 重要な個人情報の想起が不能であり、ふつうの物忘れで説明できないほど強い。

D この障害は、物質または他の一般的な身体疾患の直接的な生理学的作用によるものではない。」⁽³⁹⁾

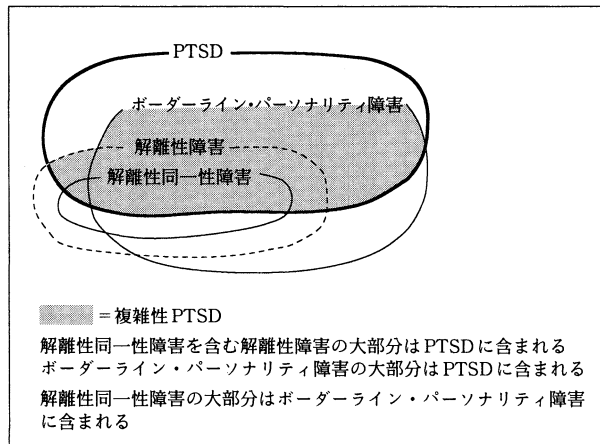
このように広く用いられている医学書に確立された診断基準が示されている障害について、その存在を完全に否定してしまうことはできないと思われる。もちろん実際に詐病であるケースもあろう。しかしこのことは、鑑定診断を慎重にすべき根拠とはなり得ても、多重人格の存在自体を否定する根拠とはならない。慎重な認定が必要であることは勿論であるが、初めから多重人格の存在自体を否定してしまうことは妥当ではないように思える。⁽⁴⁰⁾

(二) 次に問題となるのは、アメリカの刑事司法における多重人格の取り扱いということである。わが国での精神医学者および心理学者の一般的理解とは異なり、アメリカにおいても行為時人格に責任能力があれば、処罰可能であるという見解のみが唱えられているのではなく、反対説もあり、⁽⁴¹⁾理論的には行為時人格アプローチにも多くの問題があることについては既に指摘した。しかしいわゆるグローバル・アプローチについても様々な未解決の問題がある。まず主人格やホスト人格の存在が想定されているが、複数の人格の中でどのような基準でそれを選び出すのかという問題がある。またその主人格と他の人格の関係等についても困難な問題が多い。この点については、後述のように精神医学的な病状の解明と密接な関連がある。

(二) なお連続幼女殺人事件について鑑定が分かれたことに関し、前述のように人格障害と解離性同一性（多重人格）障害の關係については両者は排斥し合うものではなくPTSD（心的外傷後ストレス障害）と解離性同一性障害と人格障害（特に境界性人格障害）は重なり合う部分が大きいことを指摘し、被告人は「さまざまなトラウマと家族の病理を背景として起こった解離性同一性障害と、PTSDの合併と考えるのが妥当な診断であろう」とする見解もあり、たとえ人格障害であるとしても、そこから直ちに完全責任能力であることが導き出せるかということも検討の余地であろう。ここでまず問題となるのはPTSDと責任能力の關係である。PTSDとは Posttraumatic Stress Disorder の略で「(心的) 外傷後ストレス障害」と訳され、DSM-IVでは、解離性障害ではなく、不安障害に位置付けられているが、その位置付けについては激しい議論が存在しており、解離性障害との密接な関連性が指摘されている⁽⁴²⁾（この関連を表したものとして次の図2が参考になろう）⁽⁴⁴⁾。

この障害の特徴としては、トラウマがあつて、その追体験に苦しみ、反応性や感情が鈍麻する一方で、⁽⁴⁵⁾警戒心が強まるなどという形で、過覚醒が起こり、その結果、社会的・職業的機能が障害されるといふものである。このようなPTSDと責任能力の關係については、これまであまり論じられてこなかったが、最近いわゆる「長男金属バット殺害事件」で弁護人が被告人が長男の家庭内暴力により、PTSDを患っていたことを理由とした限定責任能力の主張を行ったことが注目される。⁽⁴⁶⁾障害の程度によつては行為の制御能力等が制限される場合も考えられよう。そのような観点でPTSDと多重人格を連想的に捉え、幼女殺人事件の被告人についても内沼・関根鑑定が反応性精神病であった点と、解離性家族他の慢性的なトラウマ環境が人格発達を妨げ、制御能力が減弱していたとすることについて、⁽⁴⁷⁾「多重人格よりも、PTSDとしての側面のために責任能力の減免を求めた点で、現代的」であるとの評価も可能であろう。但し、内沼・関根鑑定が多重人格自体が一切責任能力の減免を認める根拠とはならないとしている点には疑問が⁽⁴⁸⁾

図2 PTSDと他の精神障害の関係



和田秀樹・多重人格（1998年）96頁より

であろう。また制御可能性という観点からは、副人格自体に制御能力が認められない場合であっても原因において自由な行為の理論の適用可能性が問題となる⁽⁵⁰⁾。

（四） いずれにせよ解離性同一性障害（多重人格）については、その原因・病状・各人格の性質などについて精神医学的にも説明されていない点が多い。法律家としてはその点について判断することができないので、現状においては

ある。仮に多重人格を完全に統合された複数の人格の対等の関係として捉えたならば、行為時人格アプローチにより行為時の人格に弁別・制御能力が認められるとしても、*Self* が繰り返し主張しているように、それによって他の人格を共に処罰することはできないからである。しかしこれに対して精神医学者の中には、多重人格の病状を「臨床的事実から見ると、完全に統合された複数の人格が対等の関係で交代すると考えるのは、事実にはそぐわない理念的モデルであり」、「副人格はやはり一種の例外的状態であり、多少とも退行し、どこかで統合の緩んだ面を示しており、その点では夢遊症やトランスと連続性を持つ」ものと捉えるべきであるという主張もある⁽⁴⁹⁾。この場合にも行為者の主人格（ホスト人格）と副人格との関係が問題となる。すなわち副人格が例外的状態だとすれば、主人格が副人格を制御できたかどうかが重要である。さらにこの場合には、犯意の有無の問題も検討対象になってくる

いくつかの精神医学的仮説について、それぞれ判断を加え、究極的にどの仮説が正しいかについては、精神医学に委ねざるをえない。その意味で今後、まさにこの分野において「精神医学者と法律家の対話」（共同研究）が不可欠となる。その際に重要なことは、前提として何が法律問題であり、何が精神医学的な問題であるのかを明確にすることである。その意味で連続幼女殺人事件判決は、この問題を検討するための一つの素材を提供しているように思われる。今後は、責任能力の本質や精神医学と刑法学との関係といったより基本的な問題をも視野に入れて、この困難な問題についての検討を続けていきたい。

(1) この問題に言及している法學文献としては、佐久間修・刑法講義（総論）（一九九七年）二四六頁（注13）（「主人格による犯行ではないとはいえ、別人格も行為者の人格の一部である以上、それだけで責任能力を否定すべき根拠とはならないであろう」とする）、真野理加子「刑事責任能力に関する一考察—刑法第三九条規定をめぐって—」中京大学大学院生法学研究論集一七号（一九九七年）一七七頁（注59）および一一八頁（注60）等がある。

(2) 拙稿「多重人格と刑事責任能力」犯罪と刑罰一一号（一九九六年）九九頁以下。

(3) この事件は非常にセンセーショナルに報道されたが、その報道の問題点については、佐藤友之「報道とコメント——幼女連続誘拐殺人事件（一）（二）（犯罪報道と精神医学——小田晋の研究七、八）創三二巻六号（一九九二年）一三四以下、七号一三二頁以下、右崎正博「『幼女連続誘拐被害事件』報道—センセーショナルな犯罪報道から何がみえるか」法学セミナー三五巻五号（一九九〇年）五二頁以下、加藤久雄「幼女連続誘拐殺人被疑者とマスコミ裁判」刑政一〇〇巻一一号（一九八九年）六二頁以下等を参照。なお、その他、大和田徹・今田勇子VS警察（一九九一年）、森毅・芹沢俊介・大塚英志・密室——女高生監禁殺害・コンクリ詰め事件 幼女連続殺害事件（一九九〇年）等の著書もある。

(4) 東京地判平成九年四月一日判時一六〇九号三頁、判タ九五二号七五頁。審理の経過については、三浦英明「幼女連続誘拐殺人事件（上）——M君裁判は、いまどうなっているか」法学セミナー三八巻六号（一九九三年）九頁以下、同「幼女連続誘拐殺人事件（中）——『今田勇子』は何を残したか（一）」法学セミナー三八巻六号（一九九三年）二三頁以下、同「幼女連続

誘拐殺人事件（下）——『今田勇子』は何を残したか（二）法学セミナー三八卷六号（一九九三年）三一頁以下、公判に関しては、佐木隆三・宮崎勤裁判（上）（中）（下）（一九九一年、一九九六年、一九九七年）、鑑定について瀧野隆浩・宮崎勤精神鑑定書（一九九七年）、判決については、佐木隆三「正夢と逆夢」犯罪心理研究四号（一九九八年）一九頁以下、吉岡忍「第七の方角」犯罪心理研究四号（一九九八年）二七頁以下等を参照。

- （5） 吉田司・木村均・上芝功博・二ノ平肇「多重人格の一症例——簡易鑑定事例——」矯正医学四二卷二一四号合併号（一九九四年）六頁以下。

- （6） 以下の事案の記述について基本的に鑑定人の書いた論文（注5）中の表現に従っている。

- （7） 吉田他・前掲（注5）一五頁以下。

- （8） 吉田他・前掲（注5）一七頁以下。

- （9） 拙稿・前掲（注2）一〇三頁以下参照。なおこの説に対立するいわゆる「グローバル・アプローチ」については同一〇四頁以下参照。

- （10） 吉田他・前掲（注5）頁以下。

- （11） 判決理由には次の様な詳細な項目が付けられている。

判決目次

（争点及びこれに対する当裁判所の判断）

第一 争点

第二 当裁判所の判断

- 一 本件捜査及び審理の経過（概要）

- 二 客観的な証拠等によって裏付けられる事実

- 三 被告人の供述の要旨

- 四 被告人の取調べ状況について

- 五 被告人の捜査官に対する供述と信用性の検討

- 六 罪となるべき事実の認定について

- 七 被告人の刑事責任能力について

- 1 精神鑑定の内容
 - (一) 簡易鑑定
 - (1) 診断結果
 - (2) 理由の要旨
 - (二) 保崎ら共同鑑定
 - (1) 鑑定結果
 - (2) 理由等の要旨
 - (三) 内沼・関根鑑定
 - (1) 鑑定結果
 - (2) 理由等の要旨
 - (四) 中安鑑定
 - (1) 鑑定結果
 - (2) 理由等の要旨
- 2 検察官及び弁護人の意見
 - (一) 検察官の意見
 - (二) 弁護人の意見
- 3 検討
 - (一) 内沼・関根鑑定と他の精神鑑定との基本的な立場の相違について
 - (二) 本件一連の犯行における被告人の行為の了解可能性について
 - (三) 本件各犯行当時ころに至るまでの間及び本件各犯行当時ころの被告人の生活状況について
 - (四) 被告人の犯行当時及び現在における精神状態について
 - (1) 保崎ら共同鑑定について
 - (2) 被告人の家族歴、生育歴、行動傾向等について
 - (3) 被告人の性格傾向と人格障害について
 - (4) 被告人の知的な側面について
 - (5) 本件各犯行の動機・目的について

⑤ 被告人の本件各犯行に対する記憶について
 ⑥ 精神分裂病の疑いについて

⑦ そううつ病について
 ⑧ 結論

(2) 中安鑑定について

① 中安鑑定の要旨

② 中安鑑定の問診における被告人の本件各犯行時の精神状態に関する供述について

③ 中安鑑定の指摘する分裂病の陽性反応について

④ 中安鑑定の指摘する分裂病の陰性反応について

⑤ 中安鑑定の指摘する易怒性ないし攻撃性のこう進について

⑥ 中安鑑定に対する基本的な疑問

(3) 内沼・関根鑑定について

① 内沼・関根鑑定の指摘する被告人の反応性精神病の病像

② 内沼・関根鑑定の基本的な立場に対する疑問

③ 祖父の死亡を契機として反応性精神病を呈したとの見解に対する疑問

④ 内沼・関根鑑定の指摘する主要な病状について

⑤ 結論

(4) 簡易鑑定について

(5) 弁護人の意見について

(6) 結論

4 被告人の刑事責任能力について (結論)

(12) 判時一六〇九号六五頁以下。原則として原文を引用するが、記号等若干変更したところがある。

(13) 鑑定人は徳井達司医師であった。

(14) 鑑定人は、慶応大学医学部の保崎秀夫教授(精神神経医学)、浅井昌弘助教授(精神病理学)、仲村植夫講師(精神神経医学)、作田勉助手(社会精神医学)、東京都立大学人文文学部の馬場禮子助教授(社会心理学)、および東京都精神医学総合研究所の皆

川邦直副参事（思春期精神医学）であった。佐木・前掲書（注4）（中）三五頁以下参照。

(15) 鑑定人は、帝京大学医学部の内沼幸雄教授（精神医学）、東京大学医学部の関根義夫助教授（精神医学）であった。

(16) 鑑定人は、東京大学医学部の中安信夫助教授（精神医学）であった。

(17) すなわち裁判所は「内沼証言によれば、『被告人は、余りにもとぼけた応答が多いので、本当に虚言や詐病じゃないかなと考えたが、最後までそう断定する決め手は得られなかった。それで、膨大な文献を見たところ、すべて被告人の体験は間違いないというようなことで、やはり被告人の供述を信じるよりほかはないと考えたが、今度は、検察官の冒頭陳述と余りにも矛盾してしまふことになる。そのとき、被告人にはさまざまな解離症状があったことから、解離性同一性障害ということ想定せざるを得ないとの結論に到達した』というのであり、また、関根証言によれば、『鑑定面接で聞いた精神医学的な症状は、拘禁される前に既に起こっているから拘禁反応ではないとらえた』というのであって、内沼・関根鑑定は、被告人の公判段階における供述をそのまま犯行時の体験として理解したことによる所見である」（判時一六〇九号六八頁）と判断したのである。

(18) 判時一六〇九号九四頁以下。

(19) 判時一六〇九号九三頁以下（中段）、九五頁以下（下段）。

(20) 判時一六〇九号八五頁。

(21) 判時一六〇九号八九頁以下。

(22) 判時一六〇九号八八頁以下。

(23) 心神喪失・心神耗弱の意義について、判例は、心神喪失とは、精神の障害により事物の理非善悪を弁別する能力またはその弁別に従って行動する能力のない状態をいい、心神耗弱とは、精神の障害がまだこのような能力を欠如する程度には達しないが、その能力の著しく減退した状態をいう（大判昭和六年二月三日刑集一〇巻六八二頁）とする。

(24) 最決昭和五八年九月一三日、判時一一〇〇号一五六頁、判タ五一三号一六八頁。なお、最決昭五九年七月三日、刑集三八巻八号二七八三頁も、刑法三九条の心神喪失または心神耗弱にあたるかどうかは法律判断であって、専ら裁判所の判断に委ねられているから、鑑定人の精神鑑定書に被告人が犯行時心神喪失状態にあった旨の記載がある場合にも、その余の鑑定記録によって認められる病状等を総合して、被告人が心神耗弱状態にあったと認定しても差し支えないとする。この判例について林美月子教授は、この判例は精神分裂病の様々な病状の内、幻聴・妄想下の犯行に責任無能力を限定しているが、その理由が明ら

かでないこと、「判例は一般に、責任能力の判断は法律判断であるとの前提から、心神喪失とする鑑定があっても、動機の一了解可能性・準備の周到性・犯行の計画性・犯行隠蔽工作の依存等から、責任無能力を否定する傾向にある」が、そのような「心理学的要素の存在の過度の詮索は責任無能力制度を無にしようおそれがある」とされる(林「精神分裂症と責任能力」香川達夫・川端博編著・新判例マニュアル刑法I「総論」(一九九八年)一七一頁)。

(25) 林美月子「責任能力と法律判断」松尾古稀(一九九八年)三〇九頁以下、特に三三四頁。

(26) 安田拓人「判批」法学教室別冊判例セレクト、97(一九九八年)、三三三頁。

(27) 内沼幸雄「解離現象の精神医学的意義」日本社会精神医学会雑誌六卷一号(一九九七年)七八頁。

(28) 福島章「精神鑑定—連続幼女誘拐殺人事件—」法学教室二〇二号(一九九七年)三頁。

(29) 浅田和茂「判批」平成九年度重要判例解説(一九九八年)一五四頁。

(30) 近藤和哉「責任能力判断における『了解』について(二)」上智法学論集三九卷二号(一九九五年)一〇七頁。

(31) 福島・前掲(注28)四頁。

(32) 浅田・前掲(注29)一五四頁。

(33) 和田秀樹・多重人格(一九九八年)一六一頁。

(34) 安田助教授も「従来の診断名を重視した図式的な判断公式については再検討の余地がある」(前掲(注26)三三三頁)とされる。

(35) なおアメリカの事例については拙稿・前掲(注2)九九頁以下および中谷陽「多重人格と犯罪—米国における最近の動向—」臨床精神医学二五卷(一九九六年)二四七頁以下を参照。

(36) *Füllgrabe, Das Phänomen der Multiplen Persönlichkeit-Fakt oder bloß Artefakt?, Kriminalistik 1996, 390ff.*

(37) 判時一六〇九号七五頁。これに対して浅田教授は「鑑定に基づかない判断であり疑問である」とされる(浅田・前掲(注29)一五四頁)。

(38) 小笠原和彦・宮崎勤事件夢の中(一九九七年)二五四、二九七頁。

(39) DSM-IVについては拙稿・前掲(注2)一一四頁参照。訳は、高橋三郎・大野裕・染谷俊幸訳・DSM-VI 精神疾患の分類と診断の手引(一九九五年)一六九頁による。

(40) この問題について詳細に検討したものに、Saks/Belnke, *Jekyll on Trial-Multiple Personality Disorder & Criminal*

Law, 1997, pp. 21-38 がある。

(41) 刑事責任否定説に立つアメリカの文献として包括的なものとして、Saks 前掲書（注40）pp. 67-194 がある。

(42) 高橋・大野・染谷訳・DSM-IV（注39）一六九頁以下。

(43) 解離性障害に共通の病状をあらわしたものであるとして下の図が参考になる。

(44) 小西聖子「PTSDと解離性障害」精神医学レビュー No. 22・解離性障害（一九九七年）八六頁以下。

(45) 和田・前掲書（注33）二五一頁。

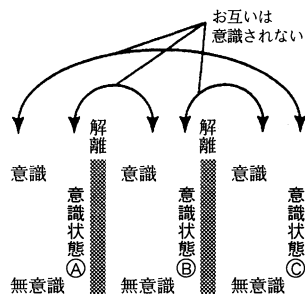
(46) これに対して東京地裁はその主張を退けた（朝日新聞一九九八年四月七日夕刊一、一九頁参照）。

(47) 和田・前掲書（注33）一七〇頁以下。

(48) 鑑定書のこの部分は、和田・前掲書（注33）一七〇頁に引用されている。

(49) 中谷陽二「解離性傷害と犯罪―夢遊症・多重人格・健忘―」精神医学レビュー No. 22・解離性障害（一九九七年）八〇頁。

(50) 判例は心神喪失・多量に飲酒するときは病的酩酊に陥り、心神喪失の状態において他人に犯罪の害悪を及ぼす危険のある素質を有することを自覚する者が、飲酒を抑止または制限する等その危険の発生を未然に防止する注意義務を怠って飲酒し、心神喪失状態で人を殺害したときは、過失致死の罪責を免れず（最大判昭二六年一月一七日刑集五卷一〇二〇頁）、ヒロポン注射をすれば精神異常をきたし、他人に暴行を加えるかもしれないことを認識しながら、その注射をしたことにより心神喪失状態に陥った者が、他人に暴行を加えて死に致したときは、傷害致死罪が成立し（名古屋高判昭三二年四月一九日高刑集九卷五号四一―頁）、酒酔い運転の行為当時酩酊による心神耗弱の状態にあったとしても、飲酒の際、酒酔い運転の意思が認められる場合には、本条二項を適用して刑の減軽をすべきではない（最決昭四三年二月二七日刑集二二卷二二六六七頁）としている。このような原則が多重人格の事例に適用可能かどうかについては慎重な考慮が必要であろう。



解離では各々が意識も無意識も持つ意識状態同士は互いに意識されない

和田・前掲書（注33）67頁より